

# ロバート・リンド小論

和田正美\*

## 初めに

以下に隨筆と書くべきか、エッセイと記すべきか、判断に迷ふところである。日本語の中に對應語があるのに外來語を使用することはどう見てもよくない。しかし日本語の中で今では市民権を獲得してゐるやうに見えるエッセイの語と本來の日本語である隨筆が過不足なく重なり合ふとは言へないかも知れないし、これから取上げるロバート・リンドは日本人ではないのだから、この小論の表記はエッセイで統一することによよう。

ここでリンドの概略を述べておくことにする。彼は千八百七十九年に北アイルランドのベルファストで生れ、千九百四十九年にロンドンで没した。享年七十歳。彼の生没年を日本の年號に直せば明治十二年生れの昭和二十四年死去といふことになり、この人が二つの大戦を経験した世

代の人間であることは一目で知れようといふものである。

成人してベルファストからロンドンに出たリンドは新聞記者として働いてゐる内、某新聞の學藝部を主宰するに至つた。すなはちリンドの本業はジャーナリストだつたのである。が、彼は一方、とある週刊誌にほとんど毎號エッセイを發表し、この仕事を二次大戦後まで續けた。今日、私達の注意を惹くのはこの「副業」の方である。リンドが書き残したエッセイは發表媒體の關係から數百篇に上るさうであり、私はそのごく一部にしか目を通してゐないが、それでもそこには看過すべからざる特質が幾つかあるやうに感じられるので、それについての考察と分析を試みようと思ふに至つた。

一頃は日本でも英語の教科書や參考書などを通して割とよく知られながら最近では滅多に顧みられることのないリンドのエッセイに再び光を當てることが出来たらといふのが私の心持である。

## 1 現實的な、そして普遍的な

イギリス文學にくはしかつた文學者の吉田健一はその『英國の文學』の中で、イギリス文學及びそれをなつたイギリス人の特徴として、現實に耐へ抜く強靱な生命力といつたことを擧げてゐる。どんな場合にも現實から眼を逸らさないで、それに耐へ、それにこだはることがイギリス人の國民性であり、この特徴はチョーサー以後のイギリス文學にも遺憾なく表れてゐるとこのイギリス通は言ふのである。

吉田ほどのイギリス文學體験のない私が彼の驥尾に付して同じことを言ふわけには行かないが、それでもイギリス文學に關して私などの直觀的に感じるものが彼の所説に矛盾しないことは述べておきたいと思ふ。

實際、イギリス文學には多くの場合、現實的姿勢が良かれ悪しかれ著しいやうに見える。

右に「良かれ悪しかれ」と書いたのは、大陸のヨーロッパ文學には惹かれるがイギリス文學にはあまり惹かれなれないといふ、日本に少なしとしない感覺の持主に配慮したのである。フランス、ドイツ、イタリア等の文學では現實と理念が並び立つ傾向があるのに對して、イギリス文學ではとかく現實が先行しがちであることは事實であり、そのことが彼等の好尚に投じないのであらう。それをわからないとは言はない。たしかにイギリス文學には、抽象に遊ぶといった類の趣きは乏しいやうである。しかしそれならイギリス文學は現實との遣取りに終始して、そこから離れたり、飛躍したりしないのかと言へば、そんなことは決してないのである。

ロバート・リンダのエッセイの多くが日常の卑近な現實についての記述をその出發點にしてゐることに注目をせられる。たとへば或るエッセイの書き出しは次の通りである。

At a west of England hotel at which I was staying, a waiter came up to me with a half-finished packet of cigarettes, and said: 'Are these your cigarettes, sir?' (One's Habits)<sup>(1)</sup>

イングランド西部のホテルに泊つてゐた時、そのホテルのウェイターが半分空になつた煙草の箱を手に持ちながら、私のところへ来て、「この煙草は御客様のでせうか」とたづねた。(習慣)

實に平凡な話であり、もしこの後そのホテルでの、これと同じく平凡

な出來事が幾つか並べられてゐるのであれば、このエッセイは讀むに堪へないであらう。ところがリンダはこの話を以下の如くに續けるのである。

作者自身であらうと思はれる語り手の「私」がそのウェイターに、何故その煙草を「私」のだと思ふのかと問ひただすと、ウェイターは、煙草の箱をこんな風を開ける人は御客様のほかにはゐないからだと答へて、「私」を驚かせる……

そしてリンダは、人間には習慣あるいは癖がないやうに見える場合にも實はそれがあるのだといふ方向に話を進め、更にそれを發展させて、習慣といふものが人間においてあらはす意味を考察の對象にする。

このエッセイの冒頭で與へられた平板な現實は作者による習慣論の中で平板さを脱して、ふくよかな立體性を獲得したと言へるであらう。

また次のやうな書き出しで始まるエッセイもある。

No man can shave every morning for twenty or thirty years without learning something. Even if he is too lazy or too incompetent to shave himself, and submits himself to barbers, he can hardly escape learning something about human nature by the time he is middle-aged. (A Sermon On Shaving)<sup>(2)</sup>

誰にしても二十年か三十年の間、毎朝鬚を剃れば、必ず何かを學ぶものゝさであり過ぎて、またはその能力がなくて自分で剃ることはせず、床屋に剃つてもらふ場合にも、中年になる頃までには、人間性について何かを學ばないですませることはほとんど不可能である

とらつてよい。(鬚剃りについでの説教)

鬚を剃ること或は剃らせることは成人男子なら誰しも習慣的に行ふことであり、それだけに普通のエッセイはこのことを殊更書き立てたりはしないし、たまたま書いたとしても、それは何等かの主題に付随する事柄としてであらう。鬚剃りといふ行為がそれ自體が主題として選ばれることは通常考へ難い。ところが右の引用文に見られる通り、リンドはこの行為を論の中心に据ゑてゐる。そして彼はそこから出發して様々な床屋の人間性を探求し、更に剃刀と石鹼と刷毛が揃はないと鬚剃りはうまく行かないことに着目して、*Do not expect too much from any one thing.* (何か一つのものに期待し過ぎるな) と言つたりするのである。

私達の身の周りの現實がその姿を少しづつ普遍に變へて行く眺めがここにはあるといへよう。

次の文は以上の二例とは違つてエッセイの冒頭ではなく、その中途に見出されるものである。

There is, I am told, no greater happiness known on earth than that of a father who, after a party to which his children's school friends have been invited, can lie back in his chair and tell himself that he did not behave so badly after all. It is always pleasant to pass an examination, but there is no examination which it is a more blessed relief to pass than an examination by one's children's friends. (The Shy Fathers)<sup>(9)</sup>

自分の子供達の學校友達を招待したパーティーが終つた後、椅子の上で體を伸ばして、結局自分はヘマと言へるほどのことはしなかつたと呟くことの出来る父親の幸福感を上回る幸福感はないのだと私は聞いてゐる。試験に合格することは如何なる場合にも楽しいものであるが、自分の子供達の友人達による試験にもまして、それに合格することが「ああ、よかつた」と思はせてくれる試験はないのである。(「はにかむ父親達」)

この文の背景を説明すると次のやうになる。どんな子供も自分の父親を絶対視してゐるが、その子供の友達に彼は絶對的な存在として映らない。だからもし友達が父親を評價してくれたら、子供の顔は立つし、父親の顔も立つといふものである。

親子の關係を軸にして家庭の幸福を至上のものに見做す感覚がこの文から傳はつて来る。いふまでもなく家庭の幸福はありきたりの現實であると同時に人間がその位置づけに頭を悩まさない永遠の、普遍的な課題でもある。論者はその傾向に應じて、それを肯定することも否定することも出来る。リンドはそれを手放して肯定してゐるわけだが、彼のこの態度は家庭の幸福といふ現實に密着してゐるやうでありながら、實はそれを一つの普遍として引き受けてゐるのである。

この問題ではイギリス文學がジェイン・オースティンその他のすぐれた家庭小説を生み出したことを想起してよいのかも知れない。

2 論理の多層性

エッセイは結論に向つてまっすぐ進むこともあるし、蛇行した果てにそこまで辿り着くこともある。原則論的にいへばそのどちらも正しいのであらう。しかしいささか八つ當りめくが、當今の日本の新聞などに載る論調の多くに見られる藝のなさに私は飽き々々してゐる。核兵器の問題にしる、親殺しや子殺しの問題にしる、教育現場におけるいぢめの問題にしる、何故ああまで一本調子で獨善的で閉鎖的なことしか言へないのか。反対原理に顧慮する姿勢は毫もなく、最初から最後まで同じことを述べてゐるに過ぎない。書き出しの敷衍を讀んだだけで結論がわかつてしまふ文章には存在理由がないのである。

その點、リンドにはしたたかなところと言つては言ひ過ぎなら藝の細かいところがある。彼は時としてエッセイといふ船の舵を左に取つたり、右に取つたりするやうに見える。

人間は忘れつばいのかどうか。リンドはこの問題を取上げて、次のやうに記してゐる。

It is the efficiency rather than the inefficiency of human memory that compels my wonder. Modern man remembers even telephone numbers. He remembers the addresses of his friends. He remembers the dates of good vintages. He remembers appointments for lunch and dinner. His memory is crowded with the names of actors and actresses and cricketers and foot-

batters and murderers. (Forgetting)<sup>(4)</sup>

人間の記憶力の非能率性ではなく、むしろその能率性が私を驚嘆させてゐる。現代人は電話番號さへおぼえてゐる。友人の住所をおぼえてゐる。よい葡萄酒が取れた日付をおぼえてゐる。晝食と夕食の約束をおぼえてゐる。現代人の頭の中は男優の名と女優の名とクリケット選手の名とフットボール選手の名と殺人犯の名でごつた返してゐる。「忘れるといふこと」]

この通り人間は少しも忘れつばくないとリンドは宣言するのだが、話をもつと進んだところで一轉して次のやうに言つてゐる。

The commonest form of forgetfulness, I suppose, occurs in the matter of posting letters. So common is it that I am always reluctant to trust a departing visitor to post an important letter. So little do I rely on his memory that I put him on his oath before handing the letter to him. As for myself, any one who asks me to post a letter is a poor judge of character.<sup>(5)</sup>

一番ありふれた種類の忘れつばいは手紙を投函することにおつて生じるやうに思はれる。それはあまりにもありふれてゐるのだから、いつも私は「歸らうとしてゐる客に重要な手紙の投函をまかせることのためらふ。その客の記憶力を信用せず、彼に手紙を渡す前に誓ひを立てさせる。私自身はどうなのかといへば、誰であれこの私に手紙の投函を頼む者は人を見る眼のない人間である。」

それではどうなのか。忘却といふテーマを運ぶ船はどんな港に入るのか。リンダの結論は、詩人や哲學者はともかく並みの人間は日常生活をきちんと送ることが出来る程度の記憶力を備へてゐる、さうでなければ家庭は崩壊するだらうといふことである。

實例をもつて一つ擧げることにする。

子供に小遣錢を與へることはよいのかどうかといふ問題をめぐつて、イギリスの或る識者は與へてよいのだと説き、別の識者は家庭内労働の報酬としてでなければ與へてはいけないと主張したのであるといふ。リンダは先づ家庭内労働の報酬としての小遣錢といふ考へ方を否定するやうに見せかける。

Apart from this, it is surely better for a child to learn to associate work with enjoyment than with money-making. (Pocket Money)<sup>(9)</sup>

それはさておき、子供においては、労働を金錢の取得よりは内心の喜びに結びつけるやうにすることの方が確實によい。「小遣錢」

少年時代のリンダには百姓仕事はすこぶる楽しかつたのだらうである。しかし彼は次のやうにも書いてゐる。

On the other hand, it may be argued that the present undermined state of my character is due to the fact that, as a child,

I was given money for nothing.<sup>(7)</sup>

一方、私といふ人間が現在この通り駄目になつてしまつたのは、子供の頃、金を無償で與へられたことがその原因なのだと言ひ立てることが出来さうである。

さうすると子供に無條件で小遣錢を與へるものではないといふことになり、次の文はこの文と意味が重なり合つてゐる。

The only thing I can say in favour of an indulgent distribution of pocket money is that it makes a child temporarily happy.<sup>(8)</sup>

小遣錢を氣前よく與へることの利點として私に言へることは一つしかない。それは子供をその時だけ幸せにやつてくれることである。

リンダはかう言つておきながら、彼が幼少の頃から小遣錢を無償で恵んでくれた人達のことを懐しげに思ひ出し、このエッセイを次のやうに締め括つてゐるのだ。

There is much to be said against spoiling children by over-indulgence, but it seems to me that if you want to give them a high opinion of human nature, the best thing to do is to begin by giving them money.<sup>(9)</sup>

子供を過保護で駄目にしてしまふことには様々に反対することが出来るけれど、人間といふのはすばらしいものだとして子供に思はせたいのなら、一番いいのは、先づ最初に金を與へることであらうと私は思はれる。

これは幾分すつきりしない結論であるかも知れないが、これを導き出すまでの紆餘曲折は同じことの平板で單調な繰返しより格段とましである。かういふエッセイは読み手を緊張させるが、蓋し緊張は書き手の中にもある。書き手も読み手も緊張しながら楽しむといふところにエッセイの醍醐味はあるのではないだらうか。

### 3 溢れ出るユーモア

現實に執着する姿勢は如何にさうしなければならぬ必要があつてもそれだけでは讀者に飽きられ、疎まれるであらう。現實の諸相を手づかみにしながら、しかもそれを普通の域にまで高めるためには中間項を設けて、それに現實の荒つぽさを和らげさせるべきであらうと思はれる。ユーモアが要請されるのはさういふものとしてではないのか。リンドのエッセイがおしなべてユーモラスであることは偶然ではないと思ふ。

As evolution advances, no doubt, we shall hear of the braces-fly and the belt-fly, the shoe-fly and the shirt-fly; and man, proud man, will be forced into nudism. (Unpopular) (2)

疑ひもなく進化の進展につれてズボン吊りや食べる蠅、シャツを食

べる蠅、靴を食べる蠅、シャツを食べる蠅が出て来るであらう。そして誇り高い人間は裸で生活することを餘儀なくされるであらう。(「人氣がなくて」)

リンドに言はせると insect (蟲) は人間に人氣がない。すなはち蟲と人間は合性が悪い。人間が他の動物に對して抱く恐怖心にはそれぞれ理由があるといふのに、蟲に限つて人間は何の理由もなくそれをこはるのである。

シドニーにズボンのボタンを食べる小型の甲蟲が出現した。それだけでも大變なことだが、蠅の慘禍と來たらそれを上回るものだとしてリンドは右のやうに記した。

いづれ人間は蠅によつて素裸かにされてしまふだらうといふこの文を大方の讀者は微笑みながら讀むだけであらうが、笑つてゐる内に、人間が蟲を絶滅させようともくろむことはよくない、蟲は人間生活に色合ひを添へてくれるのだからといふ笑へない結論に導かれるのである。

蟲にくらべると鳥類は生物學的に見て人間により近く、そこで人間は鳥をいたはることが出来る。人間性が肯定に値するものであることはこのやうな動物愛護の精神の中に見て取れるとリンドは考へて、次のやうに述べてゐる。

And, what is a particularly agreeable part of the story, Signor Mussolini, for all his fierce reputation, issued an edict that, in the country of St. Francis, the lives of the swallows were to be respected, and that the fugitives must not be shot or cap-

tured in order to be made the ingredients of 'swallow pie.' (Swallows)<sup>(1)</sup>

そしてこの話の一番楽しい部分を擧げると、ムソリーニ氏はあの通り凶暴を以て聞えてゐるにもかかはらず、布告を出して、聖フランシスの國では燕の生命を敬はねばならず、イタリアに逃げて来る鳥達を「燕バイ」の材料にする目的で討つたり、とらへたりしてはならぬと命じた。「燕」]

オーストリアが時ならぬ寒波に襲はれて、蟲が死に絶え、アフリカに飛んで行く前の燕は餌がないため餓死寸前の状態になつた。或る人の發案でオーストリア中の燕を集めて、飛行機に乗せ、アルプスを越させて、イタリアの陽光の中に放つことになつた、といふ記述に續くのが右の文である。

私はこの話の眞偽を判断する材料を持ち合せてゐないが、これは事實よりもむしろ語り口のユーモアによつて私達に訴へ掛ける文であらう。この文の執筆時期はムソリーニの名から知れようといふものであるが、戦争間近の緊迫した現實がここでは見事に和らげられてゐると言つてよ

い。ところでこのエッセイはリンドにしては珍しく具體的な現實の指摘ではなく、一般論的な議論によつて書き始められてゐる。

Though the evidence in regard to the matter is conflicting, it is still possible to maintain that human beings are the most charming of the animals.<sup>(2)</sup>

この問題をめぐる現實の證據は以下のことに反してゐるとはいへ、人間こそあらゆる動物の中で最も魅力的だと主張することは依然として可能である。

リンドはこのやうに人間性に對して樂天的である。彼が燕の話を傳へる前掲の引用文のすぐ後に Who, on reading such a story, could doubt the fundamental excellence of human nature? (誰がかういふ話を讀んで人間の基本的優秀性を疑へるであらうか) と書いてゐることも見逃せない。一次大戰を経験したばかりか、二次大戰が始まらうとしてゐる時期になつて、よくそんな呑氣なことを言へたものだと思ふ人もあらうが、性惡説にそれ相當の根據があるのなら、性善説にだつてそれがあることを私達は認めなければならぬ。この二つは思想として等價である。暗い狀況の中に置かれてゐるからといつて人間性を見限らなければならぬといふ理由はない。

私が讀んだ限りでは、リンドのエッセイの中で最もユーモラスなのは次の一節である。

A friend of mine declares that, on the first occasion on which he saw *Hamlet* from a seat in the gallery, the hoarse whisper of an orange-seller went on through the entire performance, so that Hamlet's most famous soliloquy was turned into a duet. 'To be or not to be: that is the question,' said Hamlet. 'Oranges, sweet oranges, three a penny,' whispered the boy with

the basket. 'Whether 'tis nobler in the mind to suffer, The slings and arrows of outrageous fortune, Or to take arms against a sea of troubles. And, by opposing, end them,' continued Hamlet. 'Oranges, sweet oranges, three a penny'; the <sup>(13)</sup>whisper insinuated itself into the pause. (The Orange-Eater)

私の友人がはつきり言つてゐることだが、彼が初めて棧敷席からハムレット劇を見た時、オレンジの賣り子のしやがれた聲が上演中ずつと續き、その結果ハムレットの最も有名な獨白はデュエットに變つた。「生か、死か、そいつが疑問だ」——ハムレットがさう言ふと、籠を手に持つた少年が、「オレンジ、甘いオレンジ、三つで一ペニー」と小聲で言ふ。「どつちが男らしい生きかたか、じつと身を伏せて、不法な運命の矢弾を堪へ忍ぶのと、それとも劍をとつて押しよせる苦難に立ち向ひ、とどめを刺すまであとには引かぬのどいつたいどつちが」——ハムレットがこのやうに續けると、「オレンジ、甘いオレンジ、三つで一ペニー」といふ聲がその間にすわりと入るのだつた。(「オレンジを食べる人」)

リンドはその中にオレンジの匂ひが立ちこめ、観客の唾を吐く音が聞えて来る往時の劇場を友人の言葉を借りる形で思ひ返してゐるが、舞臺の上の科白とオレンジの賣り子の聲の對比は何と絶妙なそれであることか。彼はシェイクスピアの名科白を茶化してゐるわけでは決してない。それどころかこのユーモアは、劇といふ夢がオレンジの賣り子の聲といふ現實によつて破られ、しかもその現實が一轉して夢に現實の相貌を與へるといふ効果を發揮してゐるやうに見える。ユーモアがこれほどの役

割を果す實例を私は他に知らないのである。

#### 4 現在の中に生きる過去

ケンブリッジ大學で顔を合せた何人かの學者は間もなく行はれるラグビーのオクスフォード・ケンブリッジ戦のことを知らないか、または知つてゐてもそれに關心を持たないか、そのどちらかであることを發見してリンドは暗い氣持になつたといふ。それらの人々は人間の歴史に通曉してゐて、古代世界の戦争には大層詳しかつたのである。しかしリンドは間もなく、無關心に悪いところはないと思ひ直して次のやうに書いてゐる。

Savonarola would never have become an immortal figure if he had not been indifferent to beautiful ornaments. Garibaldi would never have liberated Italy if he had not been indifferent to comfort, safety, and even the pleasure of being alive. All the great men of history have been indifferent to much that their fellow-human-beings treasured. *Nil humanum*—is there a single man of genius from Diogenes to Mr. Bernard Shaw who could have honestly taken that text for his motto? <sup>(14)</sup>(Indifference)

サヴォナローラは美しい裝飾品に無關心でなければ不滅の存在にはならなかつたであらう。ガリバルディは安樂に對して、安全に對して、生きる喜びに對してさへ、無關心でなければ、イタリアを解放

するには至らなかつたであらう。歴史上の偉人は誰しも仲間の人間達が珍重する多くのものに無關心だつた。「人間ノコトハ全テコノ私ニカカハリガアル」——ディオゲネスからバーナード・ショー氏に至る天才の中に、この言葉を本心から自分のモットーにすることの出来たやうな人が一人でもあるだらうか。(「無關心」)

リンドはケンブリッジ大學で同席した才人達に足元の現實への無關心といふ能天気ぶりを發見して呆れたと言つておきながら、すぐさま、すぐれた仕事をする人間は凡俗が關心を持つ事柄には無關心でなければならぬと述べたわけで、このやうに二つの相反する主張の間でバランスを取らうとする彼の姿勢については前々章で指摘した通りである。しかしここでこの文を引用したのはそのことを蒸し返したかつたからではない。古代ギリシャの哲學者ディオゲネスと十五世紀イタリアの宗教改革者サヴォナローラと十九世紀のイタリア統一の立役者ガリバルディと同時代のバーナード・ショーと——この四人の人物がこれほど短い文の中に顔を並べてゐる壯觀に讀者の注意を促したかつたのである。

すぐれたエッセイにおいてはそこで取上げられた現實がその彼方に普遍を望むばかりか、現在は過去に裏打ちされてゐるといへよう。何等かのやり方で歴史上の過去に溯行しようとしなない思念が所詮妄念であり、そんなものを文章化しても讀むに堪へないことは現代日本の人權思想に見る通りである。

勿論、リンドのやうに書くためには書き手にも讀み手にも或る程度の知的水準が要求される。私達は日本人としての立場からイギリスにおける他の何を批判することが出来ても、このことではイギリスに一日の長を認めてよいのではないだらうか。

さて次の文はどうか。

My heart leaped up when I beheld through them something  
even better than a rainbow—the print of a newspaper. (With-  
out Glasses)<sup>(15)</sup>

私はそれ〔修理済みの眼鏡〕を通して虹よりずっとすばらしいもの、すなはち新聞の活字を見た時、心が躍つた。(「眼鏡がないと」)

眼鏡の枠が外れて使へなくなり修理に出したので、しばらくの間、眼鏡のない不自由な生活を忍ばなければならなかつた。やうやくそれが戻つて來た時の喜びを敍したのが右の文である。

日本人の讀者の場合にはその多くがこの文を何か妙なことを言ふものだと思ひながら讀み過すであらう。實は私も初讀の時にはさうだつた。しかしこれはワーズワースの詩の一節 My heart leaps up when I behold A rainbow in the sky (私は空に虹を見ると心が躍る)を應用した文なのである。

リンドによつて取上げられた日常の些事の中に過去の名文が生きてゐる。文によつて形作られる傳統がその力の一部を現在に分け與へたと言つてもよい。私はこの流儀を好むが、これを可能ならしめるためには、過去のすぐれた文業への知識が書き手と讀み手の間で共有されてゐる必要があらう。そのやうな状態が一般的であると信じられる時、書き手はその知識を持ち合せてゐない讀者のことを氣にかけなくてよい筈である。

すでにその書き出しの部分を用いた A Sermon On Shaving (鬚剃りについての説教) の中に次の一節がある。

'You won't say anything to the boss,' he said. 'Nasty touch of influenza. Been trying to cure it. Get into trouble if you say anything.' I looked at the razor and spoke, like Harold, King of the English, under duress. 'Right,' I said.

「俺様に何も言はないでもらひたいな」と床屋は言ふ。「ひどいインフルエンザにかかつてしまったんだよ。ずつとそれを治さうとしてるんだ。お客さんが何かしやべると碌なことにならないぜ」私は床屋の手の中にある剃刀を見て、威壓されたイングリッド王ハロルドのやうな口の利き方をした。「わかりました」と言つたのである。

これは泥酔した床屋に鬚を剃らせた時の恐怖心を傳へる文である。リンドがあまりの怖さに耐へかねて No more. No more. That will do, thank you. 「もう結構です。そこで止めて下さい」と言つたところ、床屋はその彼を濁つた眼でにらみつけて、右のやうに答へたのであるといふ。

この一節の前後の文は噴き出さなくなるほどユーモラスであり、私としてはこれをリンドのユーモアについて述べた前章に含めてもよかつたのであるが、「イングリッド王ハロルド」の箇所に着目してこの章の中に入れることにした。

サクソン家のハロルドは西暦千六十四年に——正確に言へば彼はまだイングリッド王ではなかつたが——航海中に難船してフランスのノルマ

ンディー公ウィリアムに捕へられて監禁され、次期王位を譲り渡すやうにと威壓された。ハロルドは止むなく承諾するが、その約束を守らず、このことが引き金になつて二年後に史上有名なノーマン・コンクエストが起つた。

この通り、ことはイギリスの歴史であり、十一世紀の二人の貴人は二十世紀の床屋の主人と客に成り變つてゐる。過去と現在の間で自由な往き來が行はれてゐる。これは歴史といふ名の過去を現在に生かす一つのやり方であると言へるのではないだらうか。

## 結 び

以上にロバート・リンドのエッセイの特質と考へられるものを取敢へず四つに分けて考察したが、研究書によれば彼はアディソン、ステイール、チャールズ・ラムの系譜に連なつてゐるのださうである。さうするとリンドの特質はイギリスのすぐれたエッセイに見られる伝統的な特質であるのかも知れない。リンドの先輩達に關して知るところが極めて少ない私はこのことでは何も言へないが、ただ、リンドがアングロサクソンの流れに對して傍流の位置を占めてゐたことは注目すべきであらうと思ふ。「初めに」の中で述べたやうに彼はベルファスト生れのアイラランド人だつた。しかし彼はアイラランドのゲール語ではなく英語で書き、何處からどう見てもイギリス的な、すなはちアングロサクソンのエッセイの數々を發表した。彼は下手な主流の及ばない仕事をやつてのけたのである。これは一見不思議な現象であるが、よく考へるとさうでもない。たとへば政治の世界で平常時にはばつとしなかつた政治家が國家の非常時には有能な宰相として振舞ふことがあり得るやうなものである。

かういふ問題では氏素性にばかりこだはることは止めた方がよい。

本文の中で書いたことを簡略化してもう一度述べると、リンドは現実的な話題を好んで取上げたが、誇張を厭はずに言へばそれらの現実は永遠の相の下に置かれてゐる。そして私の見るところ、それを支へるのは彼の融通無礙で自由な精神である。自由な精神あるいは精神の自由——文章において最も必要なものはそれではないのか。それがありさへすれば、その持主の国籍と使用言語は問ふところではない。

リンドがよくそれを體現してゐる精神の自由は、思考においても文章においても政治主義に毒されがちな私達の在り方に一つの警鐘を鳴らしてゐるやうにさへ私には感じられる。

註

底本は次の五種類である。

- a Selected Essays by Robert Lynd 南雲堂 一九九九年九月二十五日・増補三刷
- b Essays by Robert Lynd 研究社 昭和十年二月二十五日
- c Essays On Life And Literature Everyman's Library
- d Things On Hears あぼろん社 一九七八年三月一日・第八刷
- e Modern Choice Essays 朝日出版社 一九九六年四月一日・十八刷

- (1) a 四十二頁
- (2) b 一八六頁
- (3) c 一八〇頁
- (4) a 九頁
- (5) a 十一頁
- (6) a 三十七頁
- (7) a 三十八—三十九頁
- (8) a 三十九頁
- (9) a 四十一頁

- (10) d 七十七頁
- (11) c 一八〇頁
- (12) c 二六四頁
- (13) e 二十四頁
- (14) a 二十頁
- (15) a 五十六頁
- (16) b 一八八頁

文中の譯文はすべて拙譯であるが、ハムレットの科白だけ福田恆存譯を借用した。尙、この小論は平成十八年九月十六日に湘南英文學會(山田利一會長)で行つた研究發表会 The Characteristics Of The Essays By Robert Lynd に手を加へたものである。